って勝尾寺の歴史となるおそれがあるが、それをできるだけ避け、勝尾寺と周辺村落とを関連づけながらこの地域の中世の展開をあきらかにすることに成功している。また、中世の勝尾寺領が現市域のかなりの部分を占め、この山間寺院を中心としてこの地域の中世史が展開したことから考えれば、勝尾寺文書を中心にみていくこともまた当をえているといえよう。とりわけ興味深いのは、勝尾寺が地頭職をもった高山庄をめぐる勝尾寺と領家浄土寺門跡、在地領主高山氏などとの争いで、のちの戦国大名高山氏の成長過程も追及されている。中世の文化財としては、めずらしい八天之石蔵の勝示遺構が詳細に紹介されており、貴重な調査報告といえよう。

第二巻は島田龍雄・末中哲夫・藤本篤ら諸氏が分担し、太閤検地から江戸幕府の倒壊までの政治・経済・文化にわたり、近世地方文書をたんねんに駆使して記述されている。この巻では山林・水利や西国街道瀬川宿などにかなりの部分がさかれており、入会慣行・争論・交通制度などについて興味深い事実が多い。中世以来の寺領山林をめぐって、近世に抬頭してきた小農民たちと寺院との間におこる山論は興味をそそる。全体としていえば一巻と二巻との連結に必要な織豊政権成立にいたる戦国期の記述が若干弱くなっているが、それを望むのは史料的な制約を無視したないものねだりであろうか。

箕面市ではひきつづいて目下史料篇刊行の準備が進められ、本年度中に史料篇の一、以下一年一冊の目標で史料篇の二、三がまとめられ、その後に本篇の近・現代篇がつくられる予定である。勝尾寺文書については、かつて大阪府が計画し、第一巻を出したのみで刊行を中断したいきさつがあり、今度箕面市によって大規模にその業がなされることは、歴史学界に大きな貢献をなすものとして大いに期待される。

（A5判　第一巻五一四頁　昭和三九年一二月　第二巻五四九頁　昭和四十一年三月　箕面市刊）

（松尾　寿）

新修島根県史　史料篇

島根県――出雲、石見国といえば、原始の昔から、古代、中世、近世、近代を通じて、それぞれの時代の特質に応じて独自な役割をはたしてきた地方である。昭和五年、『島根県史』が完成し、その歴史解明の基本文献として利用されてきたが、これを抜本的に大改訂する仕事が昭和三十五年いらい進められ、主幹田村清三郎、編纂員中村一介（近代）、河井忠親（古代、近世）、勝田勝年（中世）諸氏によって編纂されていた史料篇六冊（古代中世・近世上下・近代上中下）がこのほど完成し、多くの新史料と、研究者の利用しやすいよう数々の配慮を加えられて、学界に提供されている。以下古代中世篇を中心に紹介しよう。

まず古代は、六国史、類聚国史以下諸史料・文書の島根県関係の抄録及び日御碕神社蔵の出雲国風土記全文（校訂加藤義成氏）を掲載する。中世は、千家、北島家、日御碕神社、鰐淵寺、雲樹寺をはじめ、出雲国五〇家、石見国三二家、隠岐四家及び萩藩閥閲録など県外三件全一一七七通を収めている。これら文書は、一々例示するまでもなく、たんに北陽の一地方史にとどまるものでなく、ひろく中世の政治・経済・文化の根本史料として利用されてきたものが多数にのぼる。旧県史も、文書・記録を

原体裁のまま多数本文中に引用して独自の体裁を示していたが、文書集の形式、内容をもってはむろん本書が初めての公刊であり、旧県史には引用されなかった史料は多数あることはいうまでもない。しかし、本書の特色は、たんなる文書集ではなく、利用上の数々の配慮がなされている点にある。すなわち、一、史料要目においては、所蔵者、所蔵文書の年代・数量・概略の内容等を全文書について整理し（なお、本書登載文書は、中世全文書ではなく、省略されているものがある）二、史料編年目録、では、元暦元年以降天正迄を編年に、年次未詳のものは所蔵者別に整理し、旧県史、『大日本史料』『鰐淵寺文書の研究』等に引用されているものは関係箇所を明示する。さらに、三、索引、として、人名・地名・寺社名・官職名・件名をとりあげ、この部分だけで四〇頁にわたって掲載されている。これらの配慮は、文書集の公刊にさいし従来ともその必要性が強調されながら作業の厄介さのためにほとんど実施されていないものであって、真に利用者の便宜を考慮されたかかる仕事にとりくまれた編者勝田氏の御尽力に深く敬意を表する次第である。

ただし文書集としては、いささかの欠陥がなくもない。その一は文書名が一切割愛されていること、二には原本によって校合せず、島根県庁蔵の影写本や萩藩閥閲録等によっていることである。中世文書の文書名はたんなる見出しではなく、編者の読みの深さが入る筈であり、各文書の微妙な問題については、原本による検討がぜひとも必要である。また、旧県史いごの新収集が行なわれていないようであるし、旧県史にはあった各種記録からの抄録も割愛されている。種々な事情があったにせよ、惜しまれることである。

なお近世篇は上冊には出雲・隠岐、下冊には天領・浜田藩・津和野藩関係を収め、石見銀山旧記など記録や各種冊子を中心に収められている。近代編は、山口藩石州支配、山陰道鎮撫使事件にはじまり、自由民権運動など系統別に、文書記録から新聞記事にいたるまでを集成されている。

最後に、本書にかぎることではないが、これら府県史や市町村史は、地方自治体の事業として学界に貢献するところまことに大きい史料集を公刊されながら、一回の出版をもって版を絶ち、爾後はいたずらに価格が高騰するのが通例であるが、この事態は何とか改善されないものであろうか。島根県当局が、年々若干の費用を投ぜられるなら、これら史料集は永く版を重ね得るはずである。旧県史編纂いらいの文書・記録の保存に対する熱意が、この史料集完成の今一つの陰の力であったかと思われるが、この伝統をうけつぎ、北陽文化の心意気を示されるためにも、県当局の英断を望みたく思う。なお、本文篇のうち、近代・現代の二巻は近刊と聞く。全巻の一日も早い完成を期待する。

（古代中世篇　A5判六八二頁　昭和四十一年三月　島根県刊　近世篇上　A5判八〇八頁　下同六八一頁　昭和四十年三月刊　近代篇上　A5判七九八頁　中同七八五頁　昭和四十一年三月刊　下同七八四頁　昭和四十一年十一月刊　頒価各冊二、五〇〇円　申込先松江市中原町　渡部印刷内　県史販売委員会宛）

（熱田　公）